

一九四八年（昭和二十三年）、戦後最大の歌姫「美空ひばり」がデビューするこの年、木村涼子は、産声を上げました。

責任ある仕事をこなしながらも、優しい心で家庭を守ってきまし、活気溢れる生活の中、涼子は、実した時間を送りました。

ビールが高価だった時代に、ホップを使ったノンビアとして「ホッピー」が大流行したのもこの頃のことです。

人は闇の中から産声を上げ、そして闇の中へと消えていきます。もが儂い命を、避けがたい無堂中で懸命に生きているのです。

涼子が物心ついた頃、戦後の復興は急速に進みます。「レジャー」とい言葉が定着した豊かな時代に、涼子は、青春の日々を送りました。

いききました。

やがて日本は、高度成長期を迎えます。平和と豊かさで繁栄をもたらした経済の発展と共に、涼子は、明日を見据えて歩き始めます。

今、心の扉を開けて、懐かしい涼子は、一歩ずつ軌跡を描いていききました。

い出をたどれば、涙と笑いが詰った確かな歴史が刻まれていき充実した日々を、力強く歩んだ生でした。

涼子は、一歩ずつ軌跡を描いていききました。

気配りを欠かすことのない優し、涼子の暖かなぬくもりは、風について、いつまでも空から降り注ぎました。

振り向けば一九七四年（昭和四十九年）、涼子は、えにしの糸に誘われ、太郎と結ばれます。

木村涼子 五十七歳

二〇〇六年（平成十八年）
三月二十八日 永眠

日々の積み重ねの中で、雅代、総一郎が誕生しました。子供の笑顔は、なにより輝いて感じられたことでしょう。